©岩波書店 2012　編集者 五 盛央　発行者 馬場公彦　印刷所 精興社　Printed in Japan
発行所 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 岩波書店　電話(「思想」編集部)03-5210-4055　http://www.iwanami.co.jp/shiso/

思想

8
2012
No. 1060

小川　隆　思想の言葉
十川幸司　ジークムント・フロイト論
松本卓也　ラカン派の精神病研究
宮﨑裕助　自己免疫的民主主義とはなにか
國分功一郎　ドゥルーズの哲学原理 (3)
リチャード・シュスターマン　身体意識と行為
桂木隆夫　日本のヒューマニズムはどこから来たか
楊 海 英
　殖民地支配と大量虐殺，そして文化的ジェノサイド

岩波書店

思想　二〇一二年第八号（第一〇六〇号）　二〇一二年八月五日発行
思想　二〇一二年　第八号
第一〇六〇号
定価一二〇〇円（本体一一一四円）

◆未来の人文学を担う世代のための新たな指針
ヒューマニティーズ
全11冊〈完結〉
B6判 並製カバー

グローバル化の下で進行する学問の断片化、実用主義へのシフトなど、人文学をとりまく危機的状況に抗して切り拓かれる新たな地平。

◆哲学とは、なんであろうとするものなのか
哲学　中島隆博　定価1365円

◆理性的な討議を可能にするために
歴史学　佐藤卓己　定価1365円

◆世界に投げかけられた、問いとしての文学
文学　小野正嗣　定価1365円

◆未来社会の構想に向けた、教育学再生のために
教育学　広田照幸　定価1365円

◆法律学は、資格取得のための学問なのか
法学　中山竜一　定価1365円

◆成熟した政治認識を獲得するために
政治学　苅部 直　定価1365円

◆持続可能な発展のために、何をなしうるか
経済学　諸富 徹　定価1365円

◆社会学的想像力の新たな創造にむけて
社会学　市野川容孝　定価1365円

◆外国語を学ぶ——その根源的な意味を問う
外国語学　藤本一勇　定価1365円

◆性をめぐる政治とは何なのかを解き明かす
女性学／男性学　千田有紀　定価1575円

◆古典の読解という他者理解の試み
古典を読む　小野紀明　定価1365円

（定価は消費税5%込みです）
岩波書店　http://www.iwanami.co.jp/

雑誌 04203-08
ISSN 0386-2755
4910042030827
01143

殖民地支配と大量虐殺、そして文化的ジェノサイド

——中国の民族問題研究への新視座——

楊　海英

かつて清水昭俊は思想としての人類学が殖民地的状況のなかでどのように変遷してきたかに関して、多くの先学らとともに検討し、以下のように指摘している(清水　一九九六、八頁)。

「滅びつつある」「原住民」および「原住民文化」の、現在までわずかに残っている断片的資料の収集。このような研究スタイルを後世の人類学者は「サルベージ人類学」と呼んだ。わずかな過去の残存物を洗いざらい「すくい(救い＝掬い)上げる」(サルベージする)ことに専念するからである。……サルベージ人類学者は、自己を含む「文明」のために、「文明」が「滅ぼしつつある」人々から、かれらが最後まで保持していた文化遺産を受け取り、領有しようとする。サルベージ人類学は、みずからを成り立たせた認識の構えにおいて、文化の植民地的収奪に他ならなかった。

つづいて「忘却のかなたのマリノフスキー」を取り上げることによって、人類学と殖民地支配の関係性についても整理した(清水　一九九九)。清水がいう殖民地は欧米や日本だけがその主要な対象ではなく、中国も運よく選ばれている。近代以前の「中華」とその周辺世界の階層構成について、清水はいう(清水　一九九八、二七―二八頁)。

歴史家は「華夷秩序」という価値的な用語で表現するのみであり、「帝国主義」あるいは「植民地支配」という表現を与えることには慎重である。……しかし、その後に主権国家として独立した国々を単位として、「中華」世界を見るのでは、その歴史的考察として適切ではない。それは、

近代以前に「中華」世界に取り込まれていた地域の、帝国主義による植民地化とその後の近代国家の形成過程を追うだけであって、その間に介在した民族間の抑圧関係には、焦点を当てないからだ。

中国の「華夷秩序」は西欧近代の帝国主義と連続的だと指摘して、清水は私たちに大きな課題を残した。つまり、「西欧や日本帝国主義の圧政から人民を解放した」と宣言した後に、諸民族に強制した殖民地統治の実態である。「華夷秩序」は決して文質彬彬にして儀礼的に留まらず、抑圧と搾取がその実態であったことを歴史家はじゅうぶんに認識してこなかった。したがって、私は清水の理論を活かしつつ、近現代において中国に殖民地化された内モンゴルの歴史と文化を調査研究してきた立場から、社会主義における民族問題の殖民地的性質について考えてみたい。そして、間接的にではあるが、この問題は同時に日本の殖民地的過去を顧みる材料ともなりうることを主張したい。

一　共犯のサルベージ人類学

満鉄調査部や西北研究所など数多くの高等研究機関を戦前の日本は抱えていた(Shimizu 2003, pp. 49-68)。大陸から撤退したあとの日本は一九四五年からしばらく「中国でのフィールド喪失期」に入り、「中国無き中国学」が盛んとなる(馬場　二〇〇七、八五―八九頁)。時局に動員された人類学者たちは反省から、脱政治的な純粋科学としての人類学研究に戻っていった。しかし、かつて殖民地経営に共犯的に関わった営為について、期待できるほどの批判は見られなかった(清水　一九九九、六二三頁)。

東西冷戦期を経て一九八〇年代からふたたび多くの研究者たちが門戸を少し開いた中国大陸に乗りこみ、綿密な現地調査をおこなうようになった。「日中友好」が全面的に演出されていた時期に日本人人類学者たちが直面したのは、「偉大な中国共産党」が推進する「破旧立新」政策によって破壊された、「伝統文化」のない「新中国」だった。清水の言葉を拝借するならば、まさに「滅びつつある人民」が辛うじて「伝統文化」を維持し、人類学者たちは「あまりにも遅きに調査」にやってきたと自覚させられる状況だった(清水　一九九六、七―九頁)。ここから現代日本の「中国研究のサルベージ人類学」が再スタートをきる。

「サルベージ人類学」に熱心だったのは何も日本人人類学者だけではない。ときをほぼ同じくして、私も含めて、多くの留学生たちが「人民中国」から「資本主義の日本」に求道してきた。私たちも「偉大な中国共産党」の「封建的な伝統文化を滅ぼす」暴力について研究する勇気など毛頭なく、ひたすら一九四九年以前の「伝統文化の再構築」に心酔していた。「全人類が目指すべき幸せな社会主義中国」と「人民が日々搾取と抑圧に喘いでいる資本主義国家日本」を比較すれば一目瞭然だった「中国の問題群」を先送りしてきた(楊　二

○○九a、二七―三九頁)。中国独特のさまざまな「問題群」、すなわち「人民と文化を滅ぼした」共産革命という暴力を意図的に避けてきた点で、われわれネイティブ人類学徒と日本人中国研究者とは共犯関係(コラボラティヴ)をつくってきた、と少なくとも私はいま自省している。「滅びつつある文化」と「滅ぼそうとした暴力行為＝共産革命」そのものをともに研究課題とすべきだった。ただ、今日の視点で少しだけ弁明することを許されるならば、こちらも清水が主張するところの、「サルベージ人類学と同じ手法で彼らの文化的「伝統」を認識し、それを彼らの文化再生運動のシンボルに掲げている」状況(清水 一九九九、五八〇頁)を考えれば、私たち当事者による伝統指向的研究にもそれなりの意義は認められよう。言い換えれば、「現代では、先住民はしばしばサルベージ人類学と同じ手法で彼らの文化的「伝統」を認識し、それを彼らの文化再生運動のシンボルに掲げている」(清水 一九九九、五八〇頁)ので、私たちネイティブ人類学徒の研究行為にもそうした「文化を再生させようとした」目的が内包されていたのであろう。

ややふみこんで具体的に「共犯性」について指摘するならば、民族文化にもっとも多くの知識をもつ民族学者たちが中国の「民族問題」を軽視しつづけてきたことである。私は民族学・文化人類学も正面から民族問題(ナショナル・クェスチョン)にも取りくむべきだったと考えている。そして、中国を対象とする際には、殖民地支配と大量虐殺が一九七六年までの少数民族支配の基本的な特徴であり、今日では文化的なジェノサイドが最大のねらいである事実を研究者は無視すべきではないと提唱したい。研究者はおのずからこうした視座で以て問題に直面すべきであろう。以下、内モンゴル(南モンゴル)を事例に具体的に述べていきたい。

二　殖民地支配

殖民地支配の特徴は征服者を定住させ、もとの先住民を搾取し、抑圧する点にあり、その際には「文明化の使命」を大義名分とする。私の故郷、内モンゴルは近代以降に中国と日本の二重の殖民地だった。

1　中国と日本の二重の殖民地たる内モンゴル

中国人(漢人)の大規模な侵略に危機をおぼえたモンゴル高原の住民は一九一一年に「アジア最初の近代的な民族革命」を実現させた(Onon and Pritchatt 1989; Liu 2006; 楊 二〇一一a、一〇九―一三〇頁)。北のモンゴル高原は独立できたが、南の同胞たちは中国人軍閥に抑えられ、生活の基盤である草原は開墾され、大量虐殺が各地で長期間横行した。内モンゴルは中華民国において政治的地位が不明確な「辺境」とされたが、独立への夢を一度たりとも諦めることはなかった。貴族階級の王公も庶民も度々ウルガ(クレー、今日のウラーンバートル)の「聖なる大ハーン」ジェブツンダムバ・ホトクトに忠誠を尽くす書簡を送っては救済を求めた。「聖なる大ハーン」のモンゴル政権も同胞たちを解放しようと軍事的な統一作戦を

試みた。一方、中華民国の軍人たちも何度もモンゴル人に対して武力を行使し、銃口の下で中国人政権への忠実を演じた。したがって、モンゴル人からすれば、中国の最初の近代的な「革命」は中国人農民の入殖によって確保した殖民地のより強固な占領を意味していたのである(楊 二〇一一a、一〇九―一三〇頁)。

やがて「チンギス・ハーンは義経なり」という旗印を掲げたサムライたちが草原に現れ、ロシアの勢力を追い払って内モンゴルの東半分をもぎとって満洲国を創成した。満洲国の国土の半分をモンゴル人がいる草原が占めていた事実から、日本にとっての「満蒙」が誕生したのである。しかし、日本人が創成した満洲国はモンゴル人にさほど嫌われなかった。というのは、満洲国は教育に力を入れ、モンゴル人の近代化に大きく貢献したからである(Heissig 1944: Narangoa 2001, pp. 101-126; 楊 二〇一一b、五―八頁)。また、「五族協和」の満洲国は入殖者の中国人農民と遊牧民のモンゴル人を棲み分けさせ、草原開墾を禁止した。生態環境に配慮し、先住民のモンゴル人を優遇する政策を実施したことで、満洲国は内モンゴルだけでなく、新生のモンゴル人民共和国にとっても魅力ある国家だった(田中 二〇〇九)。一方、同時期の中華民国が内モンゴルで設置した学校は一つだけで、「幸運」にもそれは私の母校――国立伊克昭(イヘジョー・アイマク)盟中学校だった。内モンゴルに拠点をおく傅作義らの中国人軍閥はモンゴル人を対日協力者と見なし、見つけ次第銃殺するという「モンゴル人無き内モンゴル」を実現させようと努力し、山西省や河北省の中国人侵略者たちの定住に大きく「貢献」した。これが、二つの殖民地宗主国の政策と運営上の根本的な違いだろう。

宗主国中国は別の宗主国日本の殖民活動を排除することで、他人の領土すなわちモンゴル人の国土をみずからの範疇に組み入れた。つまり、「抗日」を通して内モンゴルを自国領と主張する根拠を中国人たちは得たのである。少し、横道にずれるが、台湾(フォルモサ)の近代史的な変遷も、この主張の傍証となりうる。台湾は台湾の先住民たちの故郷であるにもかかわらず、抗日に勝利したものの、国共内戦に敗れた蒋介石軍の避難先となり、中華民国に変わっていったのである。

内モンゴルのモンゴル人は一九四五年夏から秋にかけて、一瞬の殖民地解放の感動を経験した。ソ連・モンゴル人民共和国連合軍は万里の長城まで進軍し(写真1)、チョイバルサ

写真1　万里の長城まで進軍したモンゴル人民共和国の将校たち(*Mongolchuud*, Monsudar, 2011 より).

ン元帥の言う「わが血肉を分かち合った内モンゴルの同胞たちの解放」を目指して果敢に戦った(フスレ 二〇〇四、二頁)。内モンゴルのモンゴル人たちも「内モンゴル人民共和国臨時政府」や「東モンゴル人民自治政府」などを立ち上げて、全民族の統一を目指した。しかし、大国同士で勝手に交わした「ヤルタ協定」の女神はモンゴル人に微笑まなかった。モンゴル人からすれば、「太陽の国(ナクン・ウルス)(モンゴル語で「日の丸の国」の意)からの善良で近代的な殖民者」は追い払われたが、「文明人」を自称する字も読めない粗野な中国人農民たちを永遠にモンゴル人の領土に残してしまった(楊 二〇一一b、二七―三〇頁)。私たち内モンゴルのモンゴル人は同胞とともに国民国家を建設する機会を奪われ、かわりに中国人を「兄貴」にして「中国人民」として生きなければならなくなったのである。したがって、私は、中国をはじめ世界各地に民族問題が多発しているのは、第二次世界大戦の戦後処理が火種を埋めこんだためだと認識している。

2 変わらぬ民族革命の性質と殖民地支配

そもそも近代におけるモンゴル人の民族革命は内外(南北)を問わず、中国人の侵略と草原開墾に反対し、抵抗するために勃発したものである。言い換えれば、「反開墾史」＝民族自決史の構図を成している。独立モンゴル国の初代元首、「聖なる大ハーン」のジェブツンダムバ・ホトクトは「草原に侵入して大地を黄色くしてしまう漢人どもを殲滅しよう」との命令文を全土にくりかえし配布して、民族革命を鼓舞していた(楊 二〇〇五)。武装蜂起を指揮した内モンゴル東部のガーダー・メイリンも、西部オルドス地域のウルジイジャラガル(シニ・ラマ)も強烈な反漢・反草原開墾の精神を緩やかに共産主義思想と結びつけようと試みていた。一九二五年秋に長城の町、張家口で成立したモンゴル人の政党「内モンゴル人民革命党」も同様の目標を掲げていたが、コミンテルンとモンゴル人民共和国の直接的指導を仰いでいた点が斬新だった。しかし、皮肉にも殖民政府の満洲国がモンゴル人の草原を保護し、中国人の入殖を制限する政策を実施したため、内モンゴル人民革命党の党員たちもコミンテルンの示唆を受けながら、喜んで満洲国の優秀な官吏と軍人に変身していったのである。

満洲国が消滅したあと、中国人共産主義者を信じるしかなかった内モンゴルのモンゴル人たちは、一九四六年から中国領内に留まらざるを得なかった。社会主義の大本営モスクワで訓練を受けた「赤い息子」のウラーンフー(烏蘭夫)(一九〇六―八八年)は満洲国の役人と軍人からなる「日本刀を吊るしたモンゴル人たち」(挎洋刀的)を温存して、内モンゴル自治政府を一九四七年五月一日に建立した。中華人民共和国が現れる二年半も前の歴史的快挙である。ウラーンフーは遅くとも一九四七年三月一七日までに共産党中央委員会に対し、「自決権」の承認と「民主連邦国」の建設を求めていたことが中国共産党側の文献でも確認できる(中共中央統戦部 一九九一、

一三二四頁)。ウラーンフーはソ連型の民族自決を中国で実現させたかった。むろん、中国共産党自身、当時はまだ大変魅力的な「民族自決」の看板を振りかざして「辺境の野蛮人」たちの「遠心力」を抑えてきたことは周知の事実である(毛里 一九九八、三三―五四頁)。しかし、ウラーンフーとその仲間たちはみごとに裏切られ、少数民族に与えられたのは有名無実の「区域自治」であった。

3 社会主義殖民地の強化

同胞のモンゴル人民共和国との統一の道が閉ざされ、中国を選ばざるを得なかった内モンゴルの革命家たちであるが、彼らは例外なく内モンゴルは中国の殖民地だ、と認識していた(烏蘭夫 一九六七、二六頁)。近代に入ってから中国人は周辺世界への殖民を積極的に進めてきたが、社会主義制度は殖民行為の防波堤になるだろう、と天真爛漫な少数民族側は信じていた。しかし、中国人共産主義者たちは従前の民族問題、すなわち草原開墾と中国人入殖をまったく解決しようとしなかったどころか、逆に殖民行為を「辺疆開発」と「国防強化」の名目で一層正当化したのである。

内モンゴル自治区の場合だと、一九四九年にモンゴル人が約一〇〇万人だったのに対し、中国人は五〇〇万人になっていた。貧しい農民の代表を自認する共産党はモンゴル人遊牧民の「草原は天の賜物」という共同所有の古い理念を無視し、放牧地を有する先住民のモンゴル人を軒並み「地主」ないしは「牧主(ムージュ)」と認定して、その「土地」を「平和的」に剝奪した。「牧主」という言葉は中国共産党が創成したもので、もともとモンゴルなどの遊牧民社会にはなかった概念である。遊牧民社会は階層化が進んでおらず、中国人社会のように「地主が貧農を搾取する」という「階級による搾取」は存在していなかった。中国共産党はモンゴル人社会を分断し、殖民した中国人にモンゴル人の土地を分け与えるために、こうした「階級理念」に基づく概念を創り上げたのである。共産党の理念と政策に沿って、搾取階級は肉体的にも消滅させられ、土地を獲得できた「中国人民は立ちあがって(站起来)」モンゴル人の故郷に定住した。増加しつづける中国人殖民者たちはモンゴル人の抵抗を受けることもなく、嬉々として大地に犂と鍬を入れていった。「一九五八年から一〇〇〇万畝開墾したが、六〇%以上が沙漠と化した」と中国人共産主義者の共犯者でもあるウラーンフーは一九六四年に嘆いている(批闘烏蘭夫聯絡站 一九六七、四二頁)。あえて繰り返すが、モンゴル人革命家のウラーンフーは中華人民共和国が成立する前の内モンゴルを「中国の殖民地」と理解していた。彼は「被抑圧民族のモンゴル人」を率いて殖民地的状況から脱出しようとしたが、入殖する中国人人口の増加と草原開墾面積の拡大の事実から、殖民地は「解放」されるどころか、悪化の一途をたどっていた事実にも気付いていた。そのため、中華人民共和国が成立して一〇年が経った一九五九年になっても、ウラーンフーはまだ「内モンゴルは歴史的にずっと独立

国家だった」と主張し、「モンゴル民族は自治、自決を求め、独立と統一を実現せねばならない」と話していた(楊 二〇一二、九三四頁)。ウラーンフーは一九六六年春に失脚するが、この時点で、彼が「解放」したはずの殖民地内モンゴルの人口比率は「七対一」に変わっていた。七人の中国人殖民者が一人のモンゴル人を「助ける」状況だった。

こうした事実は中国だけのことではない。貧しいロシア人からなるボルシェヴィキは中央アジアの諸民族を「解放」したと宣言しているが、彼らはロシア人の入殖を禁じようとしなかったし、ロシア人が現地の人々を差別するのも止めなかった。「ロシア人が入植・定住したタタールスタンはじめ中央アジアからカフカースのムスリム民族地域は、〈海外領土〉ではなく、ロシアが延長した領土の一部と考えられていた」(山内 二〇〇九、三九八頁)。中国人たちも何の根拠もなく内モンゴルを「わが国の固有の領土」と考え、殖民と定住を強引にすすめていった。

反殖民と反開墾がモンゴルの民族革命の性質であるが、その目標は社会主義中国の誕生で達成されることはなく、かえって深刻さを増した。大漢族主義は決して「蔣介石ら国民党反動派」の専売特許ではなく、「全人類の解放」を標榜していた中国共産党がそのライバルより遥かに露骨な差別的な態度で「立ち遅れた少数民族」に接したという事実にモンゴル人は驚愕した。近代の産物である民族問題を社会主義が解決できなかったという事実から、殖民地は一九六〇年代に終焉を迎えたとは言い難くなる。少なくとも「社会主義殖民地」は、ヨーロッパを宗主国とする殖民地が崩壊していくなかで、逆に強化され、共産主義のイデオロギーによって正当化されていったと断言できよう。

二〇一一年五月一一日、内モンゴル自治区シリーンゴル市近郊のモンゴル人牧畜民が中国人開発業者によって殺害された。天幕の近くで石炭の露天鉱が発見され、連日昼夜にわたって数百台もの中国人のトラックが殺到していた。トラック隊は草原を無秩序に走り、脆弱な植被を壊して沙漠化をもたらし、家畜をひき殺しても弁償しようとしなかった。そして、「モンゴル人を殺しても金さえはらえばいい」と暴言を吐いて、先住民に襲いかかった(楊 二〇一一d)。一一月にはオルドス市ウーシン旗でも同様の事件が起こった。これらの出来事は氷山の一角にすぎず、同種の凄惨な事実は数多くある。共産党政府はそのつど人民解放軍を投入して反発するモンゴル人を鎮圧し、開発と資源の略奪を正当だと肯定してきた。こうした現実から考えると、草原を守ろうとするモンゴル人と開墾・開発(実質上は略奪と破壊)しようという中国人の対立は二一世紀に入っても何ら変わっていない。中華民国の国民党と軍閥だけが悪で、共産党と社会主義者の開墾は善であるとする言説はまったく成り立たない。「少数民族を助ける善良な中国人共産主義者」の行為は侵略と殖民ではないとの強弁は、エドワード・サイードが指摘する殖民地支配に見られる「再設定・再設置」(サイード 一九九三)に通じる。そこには

民族革命・民族問題の性質を凌駕した、生業のエートス(松井 二〇一一、二一一頁)をも超えた文明間の衝突が歴然と存在している現実がある。

二一世紀に入った現在、「七対一」よりさらに飛躍して「一〇人の中国人が一人のモンゴル人を愛している」内モンゴルがもし殖民地ではないというのなら、「自治」を取り消された「漢土」と名前を変えたほうがより実態に近いだろう。

三　大量虐殺

社会主義者たちは「民族の消滅」を理想に掲げ、そのために闘争してきた歴史がある。「偉大な中国共産党」も無産階級文化大革命中に、彼らが得意としてきた暴力で「民族の消滅」を実現させようとした。内モンゴル自治区では、この地域が中国領とされたがゆえに、モンゴル人のみを対象とした大量虐殺(ジェノサイド)事件が発生した。

一九六六年に中国共産党によって発動され、一〇年間もつづいた文化大革命中におよそ三四万人が逮捕され、二万七九〇〇人が殺害され、一二万人に身体障害が残ったという(写真2)。当時のモンゴル人の人口は約一四〇万人だった。平均して一つの家庭から最低一人が囚われの身となり、五〇人に一人が殺されたことになる。女性をレイプするなどの性的犯罪が長期間にわたって各地で横行し、強制移住に加えて母語の使用も禁止された。すべて中国政府と漢民族主導のジェノサイドである。過去の満洲国時代に「日本に協力した罪」と同胞の国との統一合併を求めた民族自決の歴史が殺戮とレイプの口実とされたのである(楊 二〇〇九b、二〇〇九c、二〇一一b)。

先に触れた内モンゴル人民革命党は、モンゴル族の自決と独立のために、一九二五年にモンゴル人民共和国とコミンテルンの支持と関与のもとで成立した政党である。その後、日本統治時代を経て、第二次世界大戦後にモンゴル人民共和国との統一を目指したが、中国共産党によって阻止された。文化大革命中に「内モンゴル人民革命党の歴史は偉大な祖国を分裂させる行為の歴史である」と毛沢東と中国共産党中央委員会から断罪され、モンゴル人のエリートたちを根こそぎ粛清する殺戮が発動された。こうした国家暴力は、従来研究者たちによって指摘されてきた「国民国家型ジェノサイド」で

写真2　文化大革命中に吊るしあげられたモンゴル人たち．彼らは日本的な近代教育を受けていたため「日本刀を吊るした奴ら」と称された．首から吊るした看板に「反毛沢東にして反社会主義，そして反革命の三反分子」や「民族分裂主義分子のボス」と書いてある(著者蔵)．

ある(楊 二〇〇八、四二〇―四二一頁)。国民国家の建設と民族自決の追求は近代の普遍的な原理の一つであるが、中国の場合はジェノサイドを発動し民族自決を否定しようとしたところに反近代的な性質が認められよう。この点は、アルジェリア人が独立を獲得しようとしたときに、「人権の国」たるフランスから拷問とリンチに掛けられたのと共通している。漢人が支配者となる国家を創ろうとする中国と、その中国による統合に反対して別の国民国家を建設しようとしたモンゴル人たちが大量虐殺の対象にされた経緯を詳細に分析した結果、「マイノリティ・ジェノサイド」にこそ社会主義中国による対少数民族政策の強権的で、暴力的な本質が内包されていると指摘できよう(楊 二〇〇九b、二〇〇九c)。今日においても、中国政府は台湾併合を善なる「祖国統一」としながら、ウイグル人やモンゴル人たちが同胞たちとの統一を目指すのは悪なる「民族分裂」だと宣伝している以上、「正義のためのジェノサイド」が再び発動される危険性は常に潜んでいる。

大量虐殺されたのはモンゴル人だけではない。「この地を新たに征服したのは、喜ばしく偉大なことです。まさに文明が野蛮に抗してすすんでいるのです。蒙昧な人びとに、開明的な国民が手をさしのべるのです」。これは、かつてフランスがアルジェリアを征伐したときの宣言である(バンセルほか 二〇一一、二〇頁)。フランス人と肩を並べる中国人も一九五八年から青海省とチベットに侵攻した。その際に共産主義思想で武装した「文明人の漢人」が「中世のヨーロッパよりも暗黒な農奴制をしいていた野蛮なチベット人反動派」を「平和的」に殲滅した。中国人の暴力は「優れた中華文明」と共産主義思想という二つの武器によって正当化された。それは、ヨーロッパの殖民者たちが振りかざしていた利器とまったく同じである。この二本の鋭利な剣はウイグル人と回族にも向けられ、一九七五年の「沙甸事件」(文化大革命期後半の一九七五年に発生したムスリムを虐殺する政治的キャンペーン。人民解放軍が七日間にわたってムスリムの村を砲撃し、老人と女性、それに子どもを含めて約三〇〇〇人の死者が出ている)(沙甸回族史編写組 一九八九、張 一九九三、一七一頁、馬萍 二〇〇六、三六〇―三六六頁)で「有終の美」が飾られたかと思われたが、一連のチベット問題への対処と二〇一一年五月の内モンゴル抗議行動への対応を見ても、中国の暴力的な本質は何ら変わっていないと断定できよう。

清水は以前「忘却のかなたのマリノフスキーを蘇らせよう」としたとき、つまり、イギリスの人類学者と殖民地統治との共犯関係について論じた際に、次のように指摘している。「今日の世界で少数民族政策といわれるものは、仮に良質なものであっても、戦間期のマリノフスキーが理解した姿での間接統治と、大差あるものではない」(清水 一九九九、五六七頁)。このコンテクストで調査対象としての中国を観察すると、少数民族地域でフィールドワークを実施しようとする外国人研究者に相変わらず厳しい制約を設けている以上、「日中友好の使者」として迎えられた日本人人類学者たちが中国

の少数民族政策を謳歌するだけでは学問の進展もなかろう。過去の称賛は許されても、賛美の対象が決して「良質なもの」ではない現実に気づかなければならない。気づいていてなおも中国による少数民族支配を褒めたたえつづけるならば、それはもはや「共犯」のレベルを凌駕していると言わざるを得ない。

四　文化的ジェノサイド

「植民地主義は、最も強力な場合には、徹底的な強奪の過程となる。植民地化された国民は、独自の歴史もなく、アイルランドとその他の場合におけるように、独自の言語すらない」(シェイマス 一九九六、一一頁)。モンゴル人の反中国人・反革原開墾に代表される反殖民地闘争の民族自決史も中華人民共和国の出現以降、「中国人とともに日本帝国主義に抵抗した革命史」や「中国革命の一部」に改竄されている。あらゆる歴史書も「中国の族史」という形をとることで所属を明確に限定することにより本来の独自の歴史は完全に抹殺されてきた。こうして、私たち内モンゴルのモンゴル人たちの独自の歴史が「中国人の歴史の一部」に転落していき、矮小化されてきたのである。清水の理論にしたがっていうならば、まさに「宗主国が(滅ぼす)植民地の現地人文化を、当の宗主国が領有する行為にほかならない」(清水 一九九九、五八一頁)。

「解放」という旗の色が褪せてきた今日、賢い中国人たちは「開発」と「発展」という新しいスローガンを発見して殖民行為を一層強化してきた。いわゆる「西部大開発」である。西部大開発は、一九五〇年代から持続的にすすめられてきた「先進的な兄貴」による「後進的な弟と妹」を「援助」するという殖民行為をさらに促進することを建前とする。中国人はつねに「先進的」で、少数民族は永遠に「助け」を必要とするというヘゲモニーの実演である(楊 二〇一一c、一一七―一三四頁)。こうしたなか、少数民族の「古めかしい」行政組織名の盟(アイマク)や旗(ホショー)は「進歩のシンボル」たる市に改名された。そして、新しい市名には後から来た中国人の言葉が冠された。内モンゴル自治区の場合だと、ジェリム盟は通遼市に、ジョーウダ盟は赤峰市になり、先住民であるモンゴル人が伝統的に用いてきた地名はつぎからつぎへと葬られていき、代わりに中国語の地名が誕生した(Bulag 2006, pp. 56-81)。草原に住む牧畜民の身近にあった数多くの民族学校は統廃合を経て、都市部に集中させられた。遠い学校に行けなくなったモンゴル人の子弟たちは近くにある「便利な中国人の学校」に入らざるを得ず、母国語を忘却する潮流に乗せられた。こうした現象を文化人類学者たちは「文化的ジェノサイド」が少数民族を席巻している、と表現している(Bulag 2010, pp. 426-443; 楊 二〇一一c、一一七―一三四頁)。

「経済的基盤」は文化の興亡を左右する。「生態移民」と称する強制移住政策の下で、モンゴル人は家畜の放牧を放棄させられて草原から追われ、汚い中国人の町に住まなければならなくなった。草原を開墾して沙漠化をもたらしたのは中国

人であるにもかかわらず、環境破壊の罪はモンゴル人とその家畜群に転化された。遊牧民が何千年にわたって暮らし続けてきても沙丘ひとつ現れなかったのに、中国人が侵略してきてから、たったの三、四〇年で黄沙が世界中に飛散するようになった事実を政府は頑として認めようとしない(楊 二〇一一c、一二一―一二五頁)。大英帝国と大日本帝国式の殖民地は行政官が雲の上に君臨して優雅な顧問の役割を果たす以外に手を出さなかったのと対照的に、中国人侵略者は党政府のトップという「人民に奉仕するポスト」からトイレの掃除という「光栄な職種」に至るまで、あらゆる就職のチャンスを先住民から奪っている。ウイグル人のオアシスでもチベット人の高原でも同じである。母国語を忘れ、新たに編成された階層制度の最底辺に先住民の少数民族を追いこむのが、中国流殖民地の目的であり、現在進行形の実態でもある(楊 二〇一一c、一一七―一三四頁)。

天安門広場に「孔老二(クンラーアル)」の肖像画を飾り、世界中に孔子学院を設置しようとしている「文明人」はあからさまな大量殺戮こそ少しは控えるようになってきたかもしれないが、文化的ジェノサイドこそ有効な手段であることに気付いている。かつては「国民党反動派」の「典型的な大漢族主義思想」だった「中華民族」論がふたたびポピュラーになってきた。何度も変節をくり返した「人格者」民族学者の費孝通先生が一九五一年に「新中国の建設」を象徴する共産党中央の雑誌『新建設』で「蔣介石の狭隘な中華民族思想」を痛烈に批判した(費 一九五一、四三―四七頁)過去を上手に封印して、一九八九年に錆びた鍋のなかの腐った「中華民族多元一体論」の雑煮料理に「漢族を中心とする」という香辛料を加えて盛りなおしたのも、殖民体制の正当化以外のなにものでもない(楊 二〇一〇、三四二―三六一頁)。

五　継続する社会主義殖民地体制

「マルクス＝エンゲルスそしてレーニン＝スターリンの忠実な後継者」を自認し、一時は「中国人民の傑出した指導者毛沢東」思想こそマルクス＝レーニン主義の「頂上(頂峰)」だとも自称していた中国人は後になって元祖たちが出した民族自決の理論がもつ危険性に気付いた。回族の馬戎は逸速く「色目人」としての忠誠心を新しい主人に表しようと努力した。彼は少数民族に付与されたNationality を抹消して ethnicity 論を「アメリカ帝国主義」から輸入した。少数民族に付帯される民族自決の権利を剝奪しようとする行為を「脱政治化」と表現した(馬戎 二〇〇四、一二二―一三三頁)。レーニンとスターリンは分離独立権を伴う民族自決権を理想としたものの、中国人共産主義者たちはそれを一度も周辺民族に与えなかった。それでも、「脱政治化」を通して諸民族が中国とは別の国民国家を建設しようとする生来の権利が「去勢」され、Mongol Nation から Ethnic Mongol に転落した(楊 二〇一一c、一一八―一一九頁)。国境の北側に住む Mongol Nation と同じ祖先と少しも違わぬ価値観を抱きながら、「中国人の養子」として「祖国は中国だ」と説く理論で毎日のように自分の「脳を洗わ」ざるを得なくなっている。

賢い中国人は民族自決の理論を一九四九年に否定したものの、何ら実権を伴わない区域自治の看板だけをなんとか今日まで維持してきた。いまとなっては、最初から有名無実だった区域自治にも殖民者の中国人たちはもはや我慢ならなくなったので、「自治(アウトノミー)」の空名を嫌い、「共治(ジョイント・ノミー)」を実施しようと奮起している(朱 二〇〇二、一一九頁、二〇〇三、一一八頁)。実態はとっくに「共治」どころか「漢治(シン・ノミー)」であるにもかかわらず、中国人は大義名分にしたがって少数民族に最後のとどめを刺して「中華」に帰納したいのである(楊 二〇一一c、一一九頁)。

> 一つの革命から、ある共和国が生まれ、圧政や特権に対抗し、平等と自由のために啓蒙の理想を世界に伝えた。……ところが、その共和国は、植民地帝国なるものを建設し、特権や不平等や専制が蔓延するにまかせてしまったのだ。……共和国をめぐる神話とは、共和国は決して誤ることなく「本質的に」「善良」で「寛大」なのに、個々人の行為によって方々で「裏切られ」、時には状況に左右されてしまったというものだ(バンセルほか 二〇一一、八、二二頁)。

これは「植民地共和国」フランスのレトリックに関する指摘である。そして、中華人民共和国にも完全に当てはまる。「三つの大きな山」(帝国主義、封建主義と官僚資本主義)を取り払った中国共産党はいまや少数民族だけでなく、漢人人民の頭上にものしかかる抑圧者となった。民族問題においても、悪いのは常に「煽動する帝国主義と国内外の民族分裂主義者」で、中国人と「人民共和国」に非があるとは絶対に認めようとしない。文化大革命中の大量虐殺をはたらいたのも「四人組」で、首都北京の中南海の住民はずっと「善良にして寛大」な「人民の好い総理」か「偉大な領袖」であると言い張る。

殖民地体制は一九六〇年代に終結したものではない。社会主義殖民地あるいは中国流殖民地はむしろ一九六〇年以降に強固な体制として確立されてきた。少数民族地域は中国の「内的な殖民地」ばかりではない。少数民族の多くが国境の向こう側にも居住し、別の国民国家を擁している事実からすれば、中国が今後、自国の利益に関わるとされる地域をすべて殖民化する傾向もすでに現れている。最も顕著な証左の一つが「上海ファイブ」という中国主導の五カ国の国際協力組織(SCO)の周辺国へのアプローチである。あからさまに同胞の拳を借りて、中国領内に住む「テロリストと極端な宗教主義者、極端な民族分裂主義者」らを叩きつぶそうとしている(楊 二〇一一b、二八四頁)。そして、巨大な「公共事業」によって「非洲(アフリカ)の同胞」たる独裁者たちに武器を売り渡してジェノサイドに加担しながらひたすら現地の資源を略奪して、

「アフリカを食い荒らす」中国の「活躍」(ミッシェル&ブーレ二〇〇九)も別の側面からこれを傍証しているという事実を無視するわけにはいかないだろう。

一九六六年から七六年にかけて、多くの「日本刀を吊るしたモンゴル人たち」が「対日協力」の罪で中国政府に虐殺された(楊 二〇〇九b、二〇〇九c、二〇一一b)。私はこのジェノサイドを「間接的な対日歴史清算」と表現している。「偉大な領袖の毛沢東」も「人民の好い総理周恩来」も日本に対して賠償金は請求しない、と寛大な胸襟を開いてみせたが、「殖民地支配の走狗たるモンゴル人」は無罪放免されることなく、血の代償をはらった。では、日本と旧殖民地たる内モンゴルとの狭間に位置する日本人人類学者はどのようにこの民族問題に関与すべきだろうか。この問いで、私は小論を終えたいのである。

今から一〇〇年前に勃発した「辛亥革命」(一九一一年)によって、「華夷秩序」にも変化が生じた、と清水は論じた。従来の「華夷秩序」内の一部が独立を実現させ、別の一部は殖民者の中国人によって「わが国固有の領土」とされてしまった。しかし、イデオロギーの面で西欧近代の「文明的優越性」を主張するのと同様に「中華文明の優越性」を前面に押し出す中国は、強権的な支配や経済的な搾取によってひきつづき独立できなかった「蛮夷」に臨んでいる。その実態を歴史家は見落としてきた(清水 一九九八、二八—二九頁)。中国を対象とした日本の「東洋史研究」が世界をリードして久しいが、イデオロギー的な呪縛からの飛躍が求められているのを自覚しなければならない。

優雅な「東洋史研究」に比べて、人類学は殖民地支配に対し両義的な関係にあった。人類学的な知識が殖民地行政府にとって有用であることを強調し、行政府に人類学の振興を要望する一方で、人類学者はまた殖民地政策に批判的でもあった(清水 一九九六、五頁)。「サルベージ流」に「滅びゆく伝統文化」に拘りつづけ、「滅ぼす暴力」にひたすら目をつぶることほど、殖民地的状況に加担する行為はなかろう。「殖民地」ということで、自身の過去に飛び火するのを日本の繊細な研究者たちは恐れているかもしれない。あるいはSFが大好きな国民であるがゆえに、「日中友好」を本当に実現させる目標のために、「善良で寛大な中国」を信じて、革命的な暴力の性質を見て見ぬふりをしているかもしれない。もしそうであるならば、それは二重の加担である。過去と現在の、殖民地的状況への二重の加担である。

引用文献

烏蘭夫 一九六七、「一九四七年七月二十三日幹部会議上的報告」、呼和浩特革命造反聯絡総部・批闘烏蘭夫聯絡站『毒草集』第一集、二五—二九頁。

沙匂回族史編写組 一九八八九、『沙匂回族史料』雲南、開遠市印刷廠。

サイード、エドワード 一九九三、『オリエンタリズム』上、今沢紀子訳、平凡社(平凡社ライブラリー)。

シェイマス、ディーン 一九九六、「序論」、テリー・イーグルトン&フレドリック・ジェイムスン&エドワード・W・サイード『民族主義・植民地主義と文学』増淵正史・安藤勝夫・大友義勝訳、法政大学出版局、一—二三頁。

清水昭俊 一九九六、「序 植民地的状況と人類学」、青木保ほか編『岩波講座 文化人類学』第一二巻「思想化される周辺世界」岩波書店、一—二九頁。

——一九九八、「序章 周辺民族と世界の構造」、清水昭俊編『周辺民族の現在』世界思想社、一五—六三頁。

——一九九九、「忘却のかなたのマリノフスキー——一九三〇年代における文化接触研究」、『国立民族学博物館研究報告』第二三巻第三号、五四三—六三四頁。

——二〇〇六、『これまでの仕事、これからの仕事——「最終講義」増補版』私家版。

朱倫 二〇〇二、「論民族共治的理論基礎與基本原理」、『民族研究』第二期、一—一九頁。

——二〇〇三、「自治與共治——民族政治理論新思考」、『民族研究』第二期、一—一八頁。

田中克彦 二〇〇九、『ノモンハン戦争——モンゴルと満洲国』岩波書店(岩波新書)。

中共中央統戦部 一九九一、『民族問題匯編』北京、中共中央党校出版社。

張承志 一九九三、『回教から見た中国——民族・宗教・国家』中央公論社(中公新書)。

馬戎 二〇〇四、「理解民族関係的新思路——少数族群問題的(去政治化)」、『北京大学学報』(哲会科学版)第四一巻第六期、一二二—一三三頁。

馬場公彦 二〇〇七、「出版界から見た日本中国学の変遷——岩波書店の刊行物を中心に」、丸尾常喜編『中国学への提言——外から見た日本の中国学研究』(日本中国学会大会オムニバス講演会講演録:第五八回)、日本中国学会、七五—一〇六頁。

馬萍 二〇〇六、「解放軍による沙匂の大量虐殺——皆殺しにされた雲南省の回教徒村」、宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺——封

ジャン=ジャック・ベッケール、ゲルト・クルマイヒ/剣持久木、西山暁義訳

仏独共同通史 第一次世界大戦(上)(下)

四六判・上製カバー・各256頁 定価各3360円(税込)

その後の世界のあり方を決定的に変えたといわれる第一次世界大戦の歴史を、政治史・経済史・軍事史から社会史・文化史に至るまでの最新の成果を踏まえ、総合的に描き出す。仏独の第一人者の共同執筆による定評ある通史。

岩波書店

印された現代中国の闇を検証』松田州二訳、原書房、三五九―三六六頁。
バンセル、N&P・ブランシャール&F・ヴェルジェス 二〇一一、『植民地共和国フランス』平野千果子・菊池恵介訳、岩波書店。
費孝通 一九五一、「発展為少数民族服務的文芸工作」、『新建設』第四巻第三期、四三―四七頁。
批闘烏蘭夫聯絡站 一九六七、『烏蘭夫的一個黒講話』呼和浩特、内大『井崗山』印刷。
フスレ 二〇〇四、「一九四五年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助――その評価の歴史」、関口グローバル研究会『SGRAレポート』第二四号、一―二七頁。
松井健 二〇一一、「書評『墓標なき草原――内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上)(下)」、『文化人類学』第七六巻第二号、二〇八―二一一頁。
ミッシェル、セルジュ&ミッシェル・ブーレ 二〇〇九、『アフリカを食い荒らす中国』中平信也訳、河出書房新社。
毛里和子 一九九八、『周縁からの中国――民族問題と国家』東京大学出版会。
山内昌之 二〇〇九、『スルタンガリエフの夢――イスラム世界とロシア革命』岩波書店。
楊海英 二〇〇〇、「モンゴル人からみた沙漠化――日本の緑化運動とも関連づけて」、日本沙漠学会二〇〇〇年度秋季公開シンポジウム『乾燥地域の環境変動――人類誕生から現代まで』、三一―三五頁。
――二〇〇五、『モンゴル草原の文人たち――手写本が語る民族誌』平凡社。
――二〇〇八、「ジェノサイドへの序曲――内モンゴルと中国文化大革命」、『文化人類学研究』第七三巻第三号、四一九―四五三頁。
――二〇〇九a、「〈救々文化〉から〈破壊力〉の究明へ――国立民族学博物館刊行物における〈中国研究〉から今後の方向を考える」、国立民族学博物館編『ユーラシアと日本――交流と表象の総括と課題:予稿集』(日本とユーラシアの交流に関する総合的研究:人間文化研究機構連携研究シンポジウム)、二七―三九頁。
――二〇〇九b、『墓標なき草原――内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』上、岩波書店。
――二〇〇九c、『墓標なき草原――内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』下、岩波書店。
――二〇一〇、「〈民族分裂主義者〉と〈中華民族〉――〈中国人〉とされたモンゴル人の現代史」、塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流――近現代中国の南と北』有志舎、三四二―三六一頁。
――二〇一一a、「モンゴルから見た清朝崩壊――民族自決と「革命(カーミン)」のあいだ」、『アジア遊学』第一四八号、勉誠出版、一〇九―一三〇頁。
――二〇一一b、『続 墓標なき草原――内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』岩波書店。
――二〇一一c、「西部大開発と文化的ジェノサイド」、『中国21』第三四号、一一七―一三四頁。
――二〇一一d、「中国内モンゴル自治区抗議デモ――繰り返される弾圧」、『産経新聞』夕刊、二〇一一年六月七日。
――二〇一二、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料(4)――毒草とされた民族自決の理論』(内モンゴル自治区の文化大革命4)、風響社。
Bulag, Uradyn 2006, "Municipalization and Ethnopolitics in Inner Mongolia", Ole Bruun and Li Narangoa eds., *Mongols from Country to City: Floating Boundaries, Pastoralism and City Life in the Mongol Lands*, China: NIAS, pp. 56-81.
―― 2010, "Twentieth-Century China: Ethnic Assimilation and Intergroup Violence", Donald Bloxham and A. Dirk Moses eds., *The Oxford Handbook of Genocide Studies*, New York: Oxford University Press, pp. 426-443.
Heissig, Walther 1944, *Der mongolische Kulturwandel in den Hsingan-Provinzen Mandschukuos*, Wien-Peking: Siebenberg.
Walter Exner.
Liu Xiaoyuan 2006, *Reins of Liberation: An Entangled History of Mongolian Independence, Chinese Territoriality, and Great Power Hegemony, 1911-1950*, Stanford, Calif.: Stanford University Press.
Narangoa, Li 2001, "Educating Mongols and Making 'Citizens' of Manchukuo", *Inner Asia*, Volume 3, Number 2, pp. 101-126.
Onon Urgunge and Derrick Pritchatt 1989, *Asia's First Modern Revolution: Mongolia proclaims its independence in 1911*, New York: Brill.
Shimizu Akitoshi 2003, "Anthropology and the Wartime Situation of the 1930s and 1940s: Masao OKA, Yoshitarō HIRANO, Eiichirō ISHIDA and their Negotiations with the Situation", Akitoshi Shimizu and Jan van Bremen eds., *Wartime Japanese anthropology in Asia and the Pacific*, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 49-108.

注 記

本稿は二〇一一年一二月一八日に早稲田大学で開かれた「中国ムスリム研究会一〇周年記念大会」でおこなった発表をもとにしている。コメントをいただいた関係各位にこの場を借りてお礼を申し上げる。

フェン・チャー、スザンヌ・ゲルラク編／藤本一勇、澤里岳史編訳
デリダ 政治的なものの時代へ
来たるべき読者たちへ――デリダ逝去後初とも言える、デリダの政治的なものの脱構築を、批判的に「遺産相続」する論文集。彼の思想は現代における喫緊の倫理上・政治上の具体的な問題にいかなる視座を与えるか。
四六判・上製カバー・312頁 定価4095円(税込)
岩波書店